父娘関係とスポーツの相互作用を活かした社会実装型研究に関するナラティブレビュー

A Narrative Review on Social Implementation Research Utilizing the Interaction Between Father–Daughter Relationships and Sports

近藤克之[a]，青山清英[b]，澤野大地[a]，久保賢志[a]，井川純一[a]

Katsuyuki KONDO[a]，Kiyohide AOYAMA[b]，Daichi SAWANO[a]，
Kenji KUBO[a]，Junichi IGAWA[a]

Key words: SANRA(the scale for the assessment of narrative review articles)，intervention research，university–community engagement
介入研究，大学地域展開

1．緒言

スポーツや運動を通した子どもと親の相互関係を捉えた調査結果として笹川スポーツ財団は，「子どもの運動・健康の視点に立ったアクティブなまちづくりに関する研究」において，全国の3歳から6歳の幼児3,000人を対象とした大規模調査を実施し，幼児の運動時間や習慣の獲得には，近隣の公園などの環境要因よりも「親子のふれあい」や「親のつながり」が要点であることを明示した[24]。この調査結果は，改めて親子関係の中で，どのようにスポーツを捉え，親しんでいくのかを再考することの必要性を喚起するものと考えられる。

親子関係について言及している先行研究では，肯定的な親子関係は心理的幸福に関連する多くの側面を高め，一方でこれらの否定的な関係は心理的苦痛を生み出すことが示されている[3]。特にスポーツは，個人の身体的健康のみならず，心理・社会的幸福にも深く関わる重要な活動であることも報告されている[23),30]。

ここで親子関係には「父親・母親」と「息子・娘」の関係があることを前提とすると，「父親-息子」「父親-娘」「母親-息子」「母親-娘」といった構図が考えられる。この個々の関係性に焦点を当てた研究としてBrown et al[5]は，父親は母親よりも，思春期の娘のスポーツへの継続的な関与において，より重要な社会化要因である可能性を示唆している。同様にSagkal et al[23]も父親が子どもの発達，特に娘の発達において際立った役割を果たす可能性を論じている。さらに，父親が娘の運動能力を高く評価し，スポーツが娘の将来にとって価値があると信じている場合に，娘はスポーツへの参加意欲を高める傾向がみられるといった報告[9]などもあり，父親と母親によって子どもとの相互関係や作用が変化すると推察できる。

その中でも「父親-娘」関係に着目してきたMorgan et al[17]は，父親と娘が一緒にクリケットへ参加し，スキル向上を支援するプログラム「Daughters and Dads Cricket」を9週間にわたり単一群で実施している。このプログラムには，単にクリケットスキルを教えるだけでなく，ジェンダー不平等に対処し，娘たちがジェンダーの偏見を理解し，それに立ち向かう力（粘り強さ，勇敢さ，レジリエンスなど）を与えることに焦点を当てた教育セッションが含まれていた。12ヶ月後の追跡調査では，父親は週に平均1.3日娘たちとクリケット活動を続けており，67%が個人的な活動として行うクリケット（簡単な動きなど）を，40%が地元のクラブ，学校，または入門プログラムでクリケットを

[a] 日本大学スポーツ科学部
College of Sports Sciences, Nihon University
[b] 日本大学文理学部
College of Humanities and Sciences, Nihon University

プレイしているか，登録していたことが示されており，オーストラリア全体では，女子の参加率が依然として低い状況の中，継続性という観点からプログラムが評価できるものであったことが報告されている。

このような「父親-娘」関係に着目したプログラムの効果検証は，Morgan et al[17]におけるオーストラリアのみならず，アメリカでのヒスパニック系家族を対象としたプログラム[19]やトルコでの父娘関係が思春期の娘の心理的アウトカムに与える影響を非西洋文化の文脈で調査される[23]など，各国の社会・文化的背景を考慮しながら行われている。日本では，スポーツに関する親子関係を考える際に，「父親-娘」の相互関係のみに焦点を当てた実践研究がほとんど見られない。これらのことから，国際的なスポーツを通した「父親-娘」関係の好事例を整理することは，日本国内における女性のスポーツへの社会化の視点のみならず，地域コミュニティづくりや，世代間のつながり（再社会化）など社会変化に応じた議論と接続させることができるものと考えられる。そこで本論文では，各国の取り組み事例を文献レビューしながら，日本の事情に鑑み「父親-娘」関係を元にしたスポーツの展開のあり方について検討することを目的とした。

2．方法

2.1　データ収集方法

本研究では，2025年8月1日から10月31日の間にPubMed，PsycInfo，Web of Science，SPORTDiscusのデータベースを用いて，(“Daughter and Dad” OR “Daughter and Father”) AND “Sports” の用語で文献検索を行い，2015年から2024年の10年間に発表された完全版の英語論文のみを分析対象とした。検索のための用語として「Physical Activity」や「Exercise」なども候補として考えられたが，「Physical Activity」や「Exercise」がエネルギー消費を伴うあらゆる身体の動きを対象とした用語[6),7),28)]であるのに対し，人々に認識されたルール等を前提としたより構造化された活動の要素を活用した事例に焦点を当てるために今回は「Sports」を用いた。分析対象論文は，a）査読付き学術誌に掲載されたもの，b）スポーツを通した実践（介入）的方法を採用したものであること（アンケートのみで調査が完了していないこと）を考慮した。

なお，日本国内において父娘関係とスポーツに着目した研究があるかを調べるために，本研究開始前に予備的調査を行った。その際には，キーワードを「父娘」「スポーツ」とし，CiNii Researchのデータベースを用いて検索を行ったところ，該当する論文等は得られなかった。

2.2　ナラティブレビューの質評価について

本論文では，ナラティブレビュー論文評価尺度（Scale for Assessment of Narrative Review Articles；SANRA）に準拠した方法論を参考とした[2)]。SANRAは，ナラティブレビュー論文の質を評価するために開発された簡潔な批判的評価ツールであり6つの項目から構成されている[2)]。6つの項目は，a）レビューの重要性の説明，b）レビューの目的の記述，c）文献検索の説明，d）文献の記述，e）エビデンスレベル/科学的推論の参照と提示，f）関連するエンドポイントデータの参照と提示からなり，著者の立場としてはこれらを意識することによって良いレビューを行うことが可能となる。

2.3　倫理的配慮

本論文では，個人情報を取り扱うことはなく，倫理的な配慮は不要であった。

3．結果

3.1　分析対象となった論文数

検索によって抽出された論文は，PubMedで14編，PsycInfoで7編，Web of Scienceで56編，SPORTDiscusで8編であった（図1）。これらを合わせた合計85編の論文から図1のように段階的なスクリーニングを行い，適格性の判断を行った結果，最終的に6編の論文が完全なレビュー対象として選定された。選定された論文の概要は表1に示した。

3.2　選定された論文の概要

本論文では，2015年から2024年の直近10年間に着目し，尚且つ「父-娘」関係におけるスポーツ活動に焦点を当てていることから，前提条件自体が絞り込まれたものであった。今回選定された論文はいずれも，オーストラリアのニューカッスル大学におけるMorgan

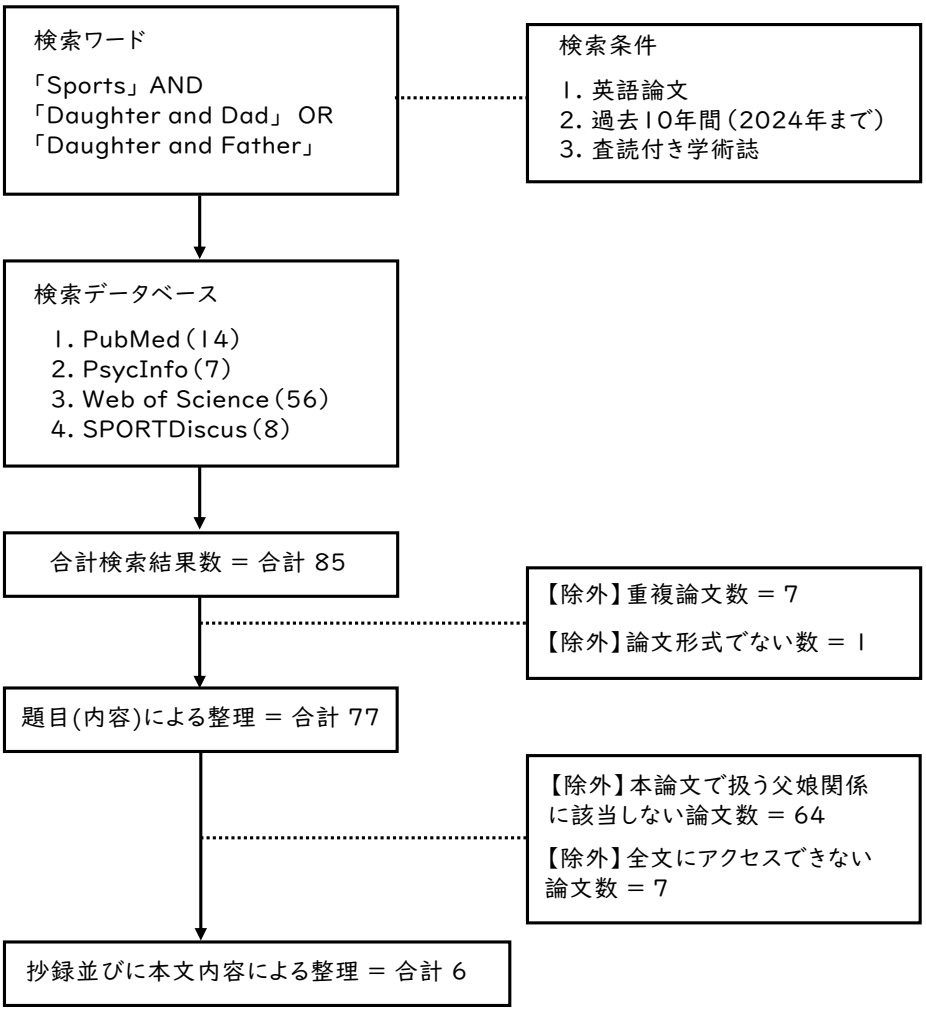


図1　論文選択フローチャート

教授を中心としたグループが継続的に取り組んでいる内容であった。

これらの研究では「Dads and Daughters Exercising and Empowered（以下「DADEE」と略す）」やそれをクリケットに特化した「Daughters and Dads Cricket」というように，プログラムを基本としながら対象者の選定とともに介入を行っていた。すべての研究において，父親（または父親的存在）を変化の担い手として位置付け，小学校年齢の娘たちの健康や幸福感を改善することが目指されていた。

介入は，理論に基づいた教育セッション（教育コンポーネント）と実践セッション（身体活動コンポーネント），および家庭での課題（ホームタスク）を組み合わせた1週間単位のセッションに基づいて進行されていた。理論的根拠としては，自己決定理論（自律性，有能性，関連性）と社会認知理論（自己効力感，目標設定，社会的支援）の主要な構成概念に基づいていた[1),15),16),17)]。また，父と娘がいわゆるジェンダーバイアスやジェンダーステレオタイプを認識し，それらを乗り越えるための知識とスキルを身につけるための教育的要素が含まれていた[15),16),21)]。

主要なアウトカムは，父親と娘の身体活動レベルの向上であり，そのための指標として1日の歩数が共通して評価されていた（表1）。また，2次的アウトカムとしては，娘の基礎運動スキル（Fundamental movement skill；FMS）やスクリーン時間，父親のペアレンティング実践（身体活動の共有）などが評価されていた[1),15),16)]。プロセス全体のアウトカムとしては参加者の高いエンゲージメントがみられ，ほとんどの研究で，プログラムの参加率，定着率，および参加者の満足度が非常に高かった（事前に設定された成功基準を上回る）ことが報告されている[1),15),16),17)]。

3.3　研究デザインと実施方法

今回選定された6編の論文からは，大学主導で始められたDADEEプログラムが，研修を受講した地元住民のファシリテーターによる地域ベースの活動へと移行していく段階性が示された。表1にもあるように，Morgan et al[16]以降の実施主体は，研修を受講した地元住民のファシリテーターであり，実施場所も大学施設から地域社会における小学校へと移されている[1),16),17)]。

このようにいわゆる社会実装型の介入研究の成果が示されているが，課題点も示されている。例えば，研究の対象者となった父親の教育レベルが高かったことや，先住民（アボリジニ）の出自のある父親の参加がほとんどみられなかったことから，結果の一般化可能性が制限されていることが認識されている[1),17)]。今後のプログラムの展開では，サンプルを拡大し，より多様なコミュニティや家族を対象とすることが推奨されるとしている。また，大学施設での研究チームによる実施から，地域コミュニティ設定での研修を受講したファシリテーターによる実施へ移行する際には，インフラ，政策，リソース，ファシリテーターや参加者の特性といった社会生態学的要因の変動が大きな課題となることも課題点として挙げられている[22)]。他の状況や多様な集団（先住民や恵まれない人々）に適合させるためには，更なるプログラムの適応が必要となる場合があることも示唆されている[16)]。

4．考察

なぜこのようなプログラムを通して父娘の関係をターゲットにしたかについてMorgan et al[15)]は，オーストラリアにおいて「女子の身体活動不足」と「父親の家族内における関与不足」という状況があることを課題意識としてもち，それが公衆衛生上の課題にもつながっていることを危惧したとしている。実際にオーストラリアの11歳から17歳の女子の9割以上は，国の身体活動ライン（中高高度身体活動を1日60分以上）を満たしていないことも指摘されている[16)]。このような身体活動を確保すると同時に，DADEEを通じて，社会文化的要因による制限という課題にも向き合おうとしていることがうかがえる。依然として女子は，社会的な性別による偏見（ジェンダーバイアス）

表1　選定された論文の概要

著者名	国/都市	対象者年齢	研究方法	アウトカム指標	フォローアップ期間	主たる成果
Morgan et al.（2019）	オーストラリア/ニューカッスル大学	娘：7.7±1.8歳 父：41.0±4.6歳	二群間 ランダム化 比較試験	・1日あたりの平均歩数など ・基礎的運動スキル（FMS）など	1．ベースライン：介入開始前（2015年1月） 2．介入後評価：2ヶ月後 3．フォローアップ評価：9ヶ月後	既存の運動促進戦略が特に女子に対して限定的な成功しか収めていないという背景に対処するために設計され，父親を変化の担い手として関与させることに成功した。
Pollock et al.（2020）	オーストラリア/ニューサウスウェールズ州	娘：8.6±2.1歳 父：41.4±4.8歳	質的デザイン/一対一の半構造化電話インタビュー	・歩数や娘のスポーツスキルなど ・心理社会的および家族機能（娘の社会情動的幸福感）など	1．ベースライン：介入開始前（プログラム開始前） 2．介入後評価：2ヶ月後 3．フォローアップ評価：9ヶ月後	介入プログラムを通して，娘の心理社会的成果，父親の行動，および家族機能全体に対して，広範かつ肯定的な影響が及んだことが推察された。
Morgan et al.（2022）	オーストラリア/ニューカッスル	娘：8.3±1.8歳 父：42.0±5.3歳	二群間 ランダム化 比較試験	・1日あたりの平均歩数など ・基礎的運動スキル（FMS）など	1．ベースライン：介入開始前（1～4週間前） 2．介入後評価：3ヶ月後 ※ 長期的フォローアップなし	大学の研究室という枠組みにとらわれず，コミュニティ設定において訓練を受けたファシリテーターが介入プログラムを実施した場合の有効性を確立した。
Pollock et al.（2023）	オーストラリア/ニューカッスル	娘：8.4±1.9歳 父：42.0±5.3歳	二群間 ランダム化 比較試験	・社会情緒的ウェルビーイング（妥当性が検証された質問票） ・娘と父の身体活動レベル（歩数）	1．ベースライン：介入開始前（1～4週間前） 2．介入後評価：3ヶ月後 ※ 長期的フォローアップなし	待機リスト対照群と比較して，娘たちの社会情緒的ウェルビーイングが有意に改善し，身体活動レベルの改善のみならず，基礎的運動スキルが改善した。
Ashton et al.（2024）	オーストラリア/ニューカッスル	娘：7.7±1.9歳 父：40.0±9.2歳	非ランダム化 単一群/介入デザイン	・娘と父の身体活動レベル（評価基準有り）	1．ベースライン：介入開始前 2．介入後評価：10週間後（プログラム終了直後） 3．フォローアップ評価：1年後	父親と娘の両方において，身体活動レベルとウェルビーイングに関する重要な改善が12ヶ月間にわたって持続した。
Morgan et al.（2024）	オーストラリア/ニューカッスル	娘：9.4±1.5歳 父：43.1±4.4歳	単一群/9週間/フィジビリティ・スタディ（実現可能性調査）	・娘と父の身体活動に対する実行可能性指標や予備的有効性指標による評価	1．ベースライン：介入開始前 2．介入後評価：9週間後（プログラム終了直後） 3．フォローアップ評価：1年後	プログラムは、娘のクリケットへの参加とスキル向上を目的として父親を対象とする世界初のプログラムであり、実現可能性が確認された。娘のクリケットスキル習熟度において中程度以上の改善があった。

や，スポーツへの参加機会を制限する文化的なバイアスに直面していることから，生涯にわたる参加に必要なスキルを習得する機会がはるかに少なくなっている可能性が示唆される。そのような際に，父親（または父親的存在）が牽引してくれる機会があれば，障壁を乗り越えるきっかけになるとも考えられる。

Bell[4]は，親が子どもに与える影響（Parent-effect）のみに焦点を当てた研究の限界から，親と子の相互作用に着目し，親から子どもへの影響と子どもから親への影響はバランスを保持しながら交換的な相互作用の下で成立することを示唆し，いわゆるスポーツ的社会化研究にも有効な視座を提供した。日本国内におけるスポーツ的社会化研究は，主にスポーツ社会学において「スポーツへの社会化」と「スポーツによる社会化」の概念を基にして行われてきたが，海老原ほか[10]の指摘以降，実証的研究の蓄積が一層期待されている。

近年の日本国内におけるスポーツ的社会化を念頭においた実証的研究では，元高校球児が大学野球部に移行する際のスポーツ的社会化過程に関する研究[14]や骨肉腫を克服した男性が車椅子バスケットボールを通じて社会に再適応していく過程をとらえた研究[29]などが挙げられる。また，過去に運動経験のある人々をスポーツ活動へ再参加させる「再社会化」に焦点を当て，スポーツイベント実施の波及効果を検討している研究もみられる[11]。これらは，スポーツ的社会化における「スポーツへの社会化」と「スポーツによる社会化」の両側面が意識された実証的研究であると言える。

日本においても，スポーツ庁の調査[26]によると，女性の運動・スポーツ実施率は男性よりも低く，特に11歳から16歳に減少傾向に転じることも指摘されている。SOMPOホールディングス株式会社が実施した「女子スポーツ特有の悩みに関する意識調査」[27]では，女子高校生の74.1％がスポーツを「やめたい」と思った経験があり，自信喪失（61.1％）に加え，生理や体調不良への不寛容（17.3％）が女性特有の要因として挙げられている。また，白ユニフォームの透けや体型露呈による悩み（48.7％）や更衣室不足（47.5％が経験，31.1％が継続不安）も10代で深刻で，このような要因が高校進学後の離脱を加速させることも指摘されている。これらの要因は，女性がスポーツを行うための環境面への配慮不足や，スポーツを行う際の課題，関わりの深い指導者の理解不足といった現状とも重ねて議論しなければならないと推察される。そのような環境要因や人的要因の重要性に加え，本研究ではいわゆる学力以外の非認知的スキルとして，忍耐力や社交性，自尊心といった社会情動的スキル（社会情動的ウェルビーイング）を，スポーツを通して養う観点も多く取り上げられてきた。児童期から青年期は，社会情動的スキルが特に大きく変化する時期とも言われ[20]，本研究の対象者の年齢はこの時期とも合致している。

日本において父親の育児参加は，共働き世帯の増加に伴い注目が高まっているが，依然として母親中心の傾向が強い[25]。政府の育児休業制度推進にもかかわらず，取得率は低迷しており，収入減少への不安や性役割観（母親が主担当であるという認識）などが参加を阻害する要因として認識できる。また，就業形態や父親自身の意識改革不足がこれを助長しているという指摘もみられる。これらのことも踏まえ，オーストラリアの事例を参照しながら，日本版の実施を検討することは，父親としての意識改革に対してもアプローチすることにもなり，日本の事情も加味した国際的な視点に立った課題解決を目指す取り組みとできるだろう。

O'Connor et al[19]は，Morgan教授のグループによるライフスタイル介入プログラムHealthy Dads, Healthy Kids（以下「HDHK」と略す）を，米国南西部のヒスパニック系家族向けに文化的な側面に配慮して適応させることを試みている。一連の検討の中で，文化的な価値観と家族構成へ配慮するためには，ファミリズムを強調する必要性が認識され，HDHKの中核である「父親」の主体的な関与に加え，母親の関与を促すための追加的な方法が採用され，「米国南西部ヒスパニック系家族版HDHK」ともいうべきプログラムが再編されている。このような事例を好事例と捉え，日本での展開を検討する姿勢も求められるだろう。

なお，選定された論文の大半は同一グループが行っている研究であり，サンプリングの偏り（対象者の教育水準が高水準であったことや，先住民の出自のある対象者が含まれていない，特定の地域における検討など）や研究デザインにおける測定ツールの妥当性（身体的なアウトカムを歩数計から評価していることや行動変容について自己評価を行っていることに対するバ

イアスなど）という点においては課題があり，それらを踏まえた上で論述していることは，本研究における限界点であると言える。

利益相反

本論文において該当事項はない。

参考文献

1）Ashton, L. M., Rayward, A. T., Pollock, E. R., Kennedy, S.-L., Young, M. D., Eather, N., Barnes, A. T., Lee, D. R., & Morgan, P. J.：Twelve-month outcomes of a community-based, father-daughter physical activity program delivered by trained facilitators. International Journal of Behavioral Nutrition and Physical Activity. 21(101), 2024.

2）Baethge, C., Goldbeck-Wood, S., & Mertens, S.：SANRA -a scale for the quality assessment of narrative review articles. Research integrity and peer review. 4(1): 5, 2019.

3）Barnett, R., & Kibria, N. : Adult daughter-parent relationships and their associations with daughters' subjective well-being and psychological distress. Journal of Marriage and Family. 53(1): 29-43, 1991.

4）Bell, R. Q.：Parent, child, and reciprocal influences. American Psychologist. 34(10): 821, 1979.

5）Brown, B. A., Frankel, B. G., & Fennell, M. P.：Hugs or shrugs: Parental and peer influence on continuity of involvement in sport by female adolescents. Sex Roles, 20(7/8), 397–412, 1989.

6）Bull, F. C., Al-Ansari, S. S., Biddle, S., Borodulin, K., Buman, M. P., Cardon, G., Carty, C., Chaput, J.-P., Chastin, S., Chou, R., Dempsey, P. C., DiPietro, L., Ekelund, U., Firth, J., Friedenreich, C. M., Garcia, L., Gichu, M., Jago, R., Katzmarzyk, P. T., … Willumsen, J. F.：World Health Organization 2020 guidelines on physical activity and sedentary behaviour. British Journal of Sports Medicine, 54: 1451–1462, 2020.

7）Caspersen, C. J., Powell, K. E., & Christenson, G. M.：Physical activity, exercise, and physical fitness: Definitions and distinctions for health-related research. Public Health Reports, 100(2): 126–131, 1985.

8）Côté, J.：The influence of the family in the development of talent in sport. The Sport Psychologist. 13(4): 395–417, 1999.

9）Dixon, M. A., Warner, S. M., & Bruening, J. E.：More Than Just Letting Them Play: Parental Influence on Women's Lifetime Sport Involvement. Sociology of Sport Journal. 25(4): 538–559, 2008.

10）海老原修，横山文人，宮下充正：スポーツ的社会化における相互的影響の検証．横浜国立大学人文紀要．第一類，哲学・社会科学．35: 99–110, 1989.

11）舩越達也，藤本淳也，永松昌樹，長ヶ原誠，佐々木康：スポーツ再社会化促進イベントが地域の「まちづくり」に及ぼす影響に関する実証的研究 -高校ラグビーＯＢ大会による地域活性化スポーツイベントとしての開催効果に着目して-. 2014年度笹川スポーツ研究助成研究成果報告書: 124–132, 2016.

12）Green, B. N., Johnson, C. D., & Adams, A.：Writing narrative literature reviews for peer-reviewed journals: secrets of the trade. Journal of chiropractic medicine. 5(3): 101–117, 2006.

13）堀越香，岡美智代：ナラティブレビューの概要：考え方，書き方，評価ツール．日本保健医療行動科学会雑誌．39(2): 42–48, 2025.

14）甲斐義一，谷口勇一：元高校球児のスポーツ的社会化過程に関する研究 -大学野球部への適応状況に着目して-. 九州体育・スポーツ学研究．26(2): 1–14, 2012.

15）Morgan, P. J., Young, M. D., Barnes, A. T., Eather, N., Pollock, E. R., & Lubans, D. R.：Engaging Fathers to Increase Physical Activity in Girls: The "Dads And Daughters Exercising and Empowered" (DADEE) Randomized Controlled Trial. Annals of Behavioral Medicine. 53(1): 39–52, 2019.

16）Morgan, P. J., Rayward, A. T., Young, M. D., Pollock, E. R., Eather, N., Barnes, A. T., Kennedy, S.-L., Saunders, K. L., Drew, R. J., & Lubans, D. R.：Establishing effectiveness of a community-based, physical activity program for fathers and daughters: A randomized controlled trial. Annals of Behavioral Medicine. 56(7): 698–711, 2022.

17）Morgan, P. J., Pollock, E. R., Kennedy, S. L., Young, M. D., Eather, N., Ashton, L. M.：Feasibility of 'Daughters and Dads Cricket': A programme targeting fathers to improve daughters' engagement and skills in cricket. International Journal of Sports Science & Coaching. 19(2): 653–667, 2024.

18）日本学術会議：我が国の子どもの成育環境の改善にむけて -成育コミュニティの課題と提言-. 心理学・教育学委員会・臨床医学委員会・健康・生活科学委員会・環境学委員会・土木工学・建築学委員会合同 子どもの成育環境分科会，https://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-23-t235-1.pdf, 2025.7.25.

19）O'Connor, T. M., Perez, O., Beltran, A., Colón García, I., Arredondo, E., Parra Cardona, R., ... & Morgan, P. J.：Cultural adaptation of 'Healthy Dads, Healthy Kids' for Hispanic families: Applying the ecological validity model. International Journal of Behavioral Nutrition and Physical Activity. 17(1): 52, 2020.

20）OECD：社会情動的スキル 学びに向かう力，明石書店，東京，2018.

21）Pollock, E.R., Young, M.D., Lubans, D.R., Barnes, A.T., Eather, N., Coffey, J.E., Hansen, V., & Morgan, P.J.：Impact of a Father–Daughter Physical Activity Intervention An Exploration of Fathers' Experiences. Journal of Child and Family Studies. 29: 3609–3620, 2020.

22）Pollock, E. R., Young, M. D., Lubans, D. R., Eather, N., & Morgan, P. J.：Effects of a father–daughter physical activity intervention delivered by trained facilitators in the community setting on girls' social-emotional well-being: A randomized controlled trial. Developmental Psychology. 59(10): 1852–1866, 2023.

23）Sagkal, A. S., Özdemir, Y., & Koruklu, N.：Direct and indirect effects of father-daughter relationship on adolescent girls' psychological outcomes: The role of basic psychological need satisfaction. Journal of adolescence. 68: 32–39, 2018.

24）笹川スポーツ財団：子どもの運動・健康の視点に立ったアクティブなまちづくりに関する研究，https://www.ssf.or.jp/files/preschool_2024.pdf, 2025.7.25.

25）島田明日華，桶作梢，濵耕子：日本における父親の育児時間に関連する要因についての文献検討．看護実践学会誌．36(2): 51-62, 2025.

26）スポーツ庁：令和6年度「スポーツの実施状況等に関する世論調査」，https://www.mext.go.jp/sports/content/250313-spt_kensport01-000040805_01.pdf, 2025.11.20.

27）SOMPOホールディングス株式会社：「10代女子は、なぜスポーツをやめてしまうのか？」意識調査を実施，https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000073.000159136.html, 2025.12.10.
28）World Health Organization.：WHO Guidelines on Physical Activity and Sedentary Behaviour. Genève, Switzerland: World Health Organization, 2020.
29）吉田毅：中途身体障害者のスポーツへの社会化に寄与する他者に関する社会学的研究：骨肉腫を克服した元車椅子バスケットボール選手の語りから．体育学研究．59(2): 855–867, 2014.
30）Zia, A., & Ali, S.：Positive father and daughter relationship and its impact on daughter's interpersonal problems. Journal of Social Sciences and Humanities. 53(2): 61–68, 2014.